

今学期においては本研究を学会論文にまとめ、公聴会において発表し、最終的に論文としてまとめを行いました。お蔭様で、調査、学会参加、まとめに関しまして、森基金を大変に有効に利用させていただくことができました。本当に感謝しております。ありがとうございました。
研究内容を以下に記します。

2006年度 森泰吉郎記念研究振興基金報告書

研究課題名：東京の水辺のオープンスペースによる都市再生に関する研究

氏名：鹿内京子

所属：政策・メディア研究科博士課程

研究課題：都市においてオープンスペースの創出と維持は、難しい問題であるが、都市におけるオープンスペースの問題は都市計画において重要な問題である。都市のオープンスペースとして、河川と川岸空間の果たす役割は大きい。本研究では、かつて江戸期に存在した「河岸」という江戸以来の川沿い空間の特質と変遷の歴史を学び、今後の東京に新たな水辺のオープンスペースの創出と維持に関する知見を得ることである。具体的には

1. 江戸に設置された「河岸」のシステムの改廃の歴史を1筆ごとの土地利用、土地所有、法制度、町との関わりから調査、分析を行う。
2. 残存する河岸地の位置と面積の調査をする。
3. 河岸の過去のデータをGISに取り込み、江戸からの河岸の1筆ごとの変遷の検証と、改廃の歴史分析を行う。
4. 過去に作ったオープンスペースのGISデータと対照させ、新しいオープンスペースを構築し、その評価を行う。

2006年度の成果

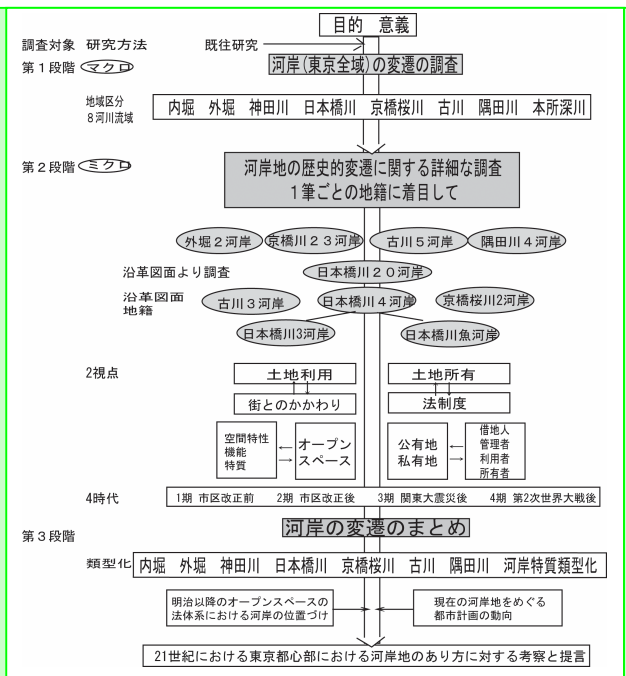
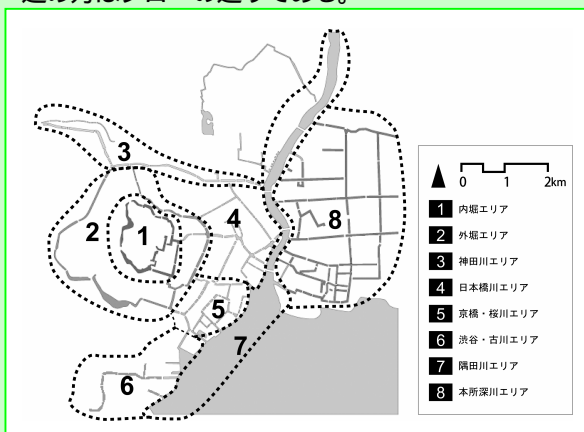
これまでの研究論文が、魚河岸、日本橋の3河岸、古川の3河岸、桜川の2河岸についての1筆ごとを単位としたミクロの研究であったのに対し、今年度は江戸期から現代までの東京全域に存在した河岸を対象としたマクロの研究をまとめた。(課題1)2006年度日本都市計画学会研究発表の論文として発表をおこなった。また、本研究全体を整理し(課題2、3)、公聴会で、今後のオープンスペースに伴う課題を含めた河岸の歴史の変遷に関する研究(課題4)について発表をおこなった。5月20日に2005年度日本造園学会論文奨励賞を受賞することができた。

研究概要及び研究方法

河岸の原単位としての「河岸地」に着目し一筆ごとの土地利用、土地所有の変遷を明治期から平成まで法制度、都市計画、社会経済的背景と対照させながら、明らかにすることを目的とする。
本研究は東京に存在したすべての河岸を対象地とした変遷の研究である。

研究の進め方

東京下町における河川は8区域に分けて分析を行った進め方はフローの通りである。



課題 1

時代を5期に分けて分析した。

- 1 期;江戸期 (1603 -1868)、
- 2 期;市区改正前 (1868-1888)
- 3 期;市区改正後 (1889 -1923)、
- 4 期;関東大震災後 (1924 -1944)
- 5 期;第二次世界大戦後 (1945)

土地利用の観点から、河岸地の位置を明確にし、面積の調査を行った。

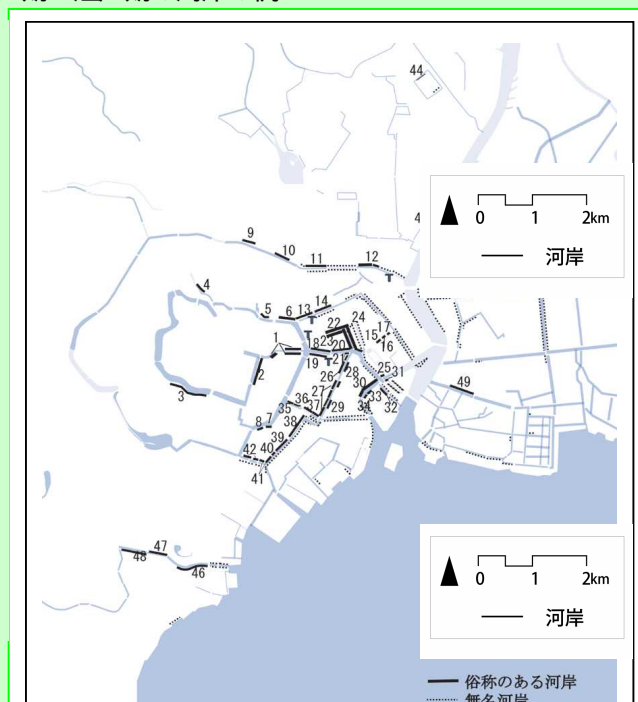
法制度。まちとのかかわりについて調査分析を行った。

土地所有の観点から所有形態を見た。

管理方法を調査した。

2006 年度日本都市計画学会学術研究論文にまとめた

1期 江戸期の河岸の例



課題 2

これまでの一筆ごとの河岸地の調査分析をまとめた。

4 エリアについての論文

外堀エリア, 日本橋・亀島川エリアについて

鹿内京子,石川幹子 (2003), 「明治以降の日本橋における魚河岸の歴史の変遷に関する研究」, ランドスケープ研究 66(5), pp.453-456,

鹿内京子,石川幹子 (2004), 「明治以降の日本橋における三河岸の歴史の変遷に関する研究」, ランドスケープ研究 6(5), pp.375-380

古川エリアについて

鹿内京子、石川幹子 (2005), 「明治以降の古川の3河岸における歴史の変遷に関する研究」, ランドスケープ研究 7 (5), pp.401-406

京橋・桜川エリア,について

鹿内京子,石川幹子 (2005), 「明治以降の桜川における二河岸の歴史の変遷に関する研究」, 都市計画論文集, No.40-3, pp.271-276

これらを他の河岸とともにあわせ、1つの流れにまとめ、公聴会において発表を行った。

課題 3, 4

GIS データに明治 15 年の情報を載せ、分析を行い、河岸の歴史の変遷から得られた知見をまとめた。

まとめ

残存する河岸地を売り払うことなく維持し、これらを核として 21 世紀の都市再生に活かしていくことが今後の課題である